



見据えるのは 2年後の自分。

「Quiet please!」

夏の蒸し暑さが充満する体育館。まわりつく空気を切り裂くホイッスルと審判の声。一瞬の静寂の後に響くのは、プレイヤーの足音と転がり弾むボールが発する僅かな鈴の音のみ。これは、

視覚に障がいを持つ人々を対象に考案された球技「ゴールボール」の練習風景です。音を頼りに迫るボールを察知し、体全体を投げ出し受け止める。受けたボールを時には素早く投げ返し、時には隣にいるはずの味方プレイヤーに投げ渡し、足音を忍ばせポジションを変え、思わぬアングルからゴールを狙う。シンプルながらそのスピード感や戦略的なプレーには、手に汗握るものがあります。その中でひととき大きな声を出し、チームを、自分を鼓舞するように練習に打ち込む選手。

それが東洋大学4年生、ゴールボール日本代表強化指定選手の山口凌河さんです。

彼は中学3年の春までは視えていた視力を、たった半年でほとんど失った中途失明者。しかし現在は学業と、2020年のパラリンピック出場を視野に入れた競技生活とを両立しながら、自らの経験に基づく講演なども精力的に行うという、とても充実した日々を送っています。その多忙な一日とはどんなものなのか、一日行動を共にして、実際に見て話を聞いてきました。

「目が視えない」
ってだけですよ。
耳も聞こえるし、
体も丈夫です。

02. INTERVIEW / 東洋大学4年生・ゴールボール代表強化指定選手 山口凌河さん：中途失明（準盲）
おにぎりの「中身」は、食べてからわかります。

05. 一日密着レポート.01 / ついて行ったら、こうでした。一緒に行って始めてわかった日常のこと。
今日、ついて行っていいですか？ ~CASE.01 山口凌河さん~

おにぎりの「中身」は、食べてからわかります。

INTERVIEW. 山口 ^{りょうが} 凌河さん 視覚障がい（準盲）／中途失明

東洋大学社会福祉学部4年生／ゴールボール代表強化指定選手

半年で視力ほぼゼロ 思いもしなかった盲学校へ

—まずは現在の視え方を教えてください。

山口：光は感じます。真っ白な霧の中にいると思ってもらえればわかりやすいかな。目の前で手を動かせば上下左右と動きはわかりますが、指の本数まではわかりません。

—中学3年までは視えていたんですね。

山口：はい、ちょうど2011年の東日本大震災の約一か月後ですね。視力の異変に気づいて。普通は近視とか遠視のレンズをかけると見えるようになりますけど、「レンズで矯正できないからこれはおかしい」ということで、セカンドオピニオンで筑波大学附属病院に通うようになって。毎週ごとに視力検査の輪っか、あれがだんだん見えなくなってって…どんどん視力が低下して半年でほぼ、視力がゼロになりました。結果「レーベル病（※1）ではないか」という診断を受けて。

—たった半年間で視えなくなってしまうというのは、その時はどんな気持ちでしたか？

山口：最初は「何が起きてるんだろう、どんどん視えなくなっていくなあ」って結構あっけらかんとしていたんですけど、病名がついて、この病気で「もう治らない」って言われた時は「あ、マジかあ、やばいなあ…」みたいな。自暴自棄になった時期も少しあったんですけど、毎日友達が家に来てくれて、目が視える視えない関係なしに同じように

接してくれて遊んでくれて。自分にとってそれがすごくうれしくて「目が視えない」とか「障がいを持っている」ということを忘れられました。それで悲観的なことなく前向きに過ごしていたな、という。ちょうど診断があったのが夏休みで9月からは学校に通うんですけど、自転車通学できないので毎日友達が迎えに来てくれるんですね。ちょっと不良っぽいや中学生と二人乗りで登校して。最初は先生に怒られていたんですけど、そのうち先生たちも「いい友達だな」って認めてくれて。これは教育的には良いかどうかわからないですけどね。そういう友達がいたから自分は学校にも通えたり、楽しく生活できたなって思います。

—友達^{の存在}が大きかったんですね。けれども高校は、一般学校へは行けなかった。

山口：みんなと同じように一般高校に行きたい、って思ってた。でも視力の状況的に厳しかった。一般高校には行けずに盲学校に進学っていうのを余儀なくされて、最初はすごくネガティブに思ってたんですけど、いざ入ってみるとすごく学ぶことが多くて、成長できた三年間だったなって思っています。

—中学まで通った一般学校と盲学校では、どんな違いがありましたか？

山口：盲学校のクラスメイトは3人で、先天性視覚障がいの男の子が一人。弱視の女の子が一人、そして僕。全校生徒で50人しかなくて。茨城の盲学校はまだ多いほうで、地方の盲学校はもっと生徒数が少ないという現状はあります。

—盲学校に行ってみて、先天性視覚障がい者との違い^{というの}は何か感じましたか？

山口：先天性視覚障がいの人っていうのは、色の概念や物のイメージがすごくつきづらいです。その代わり触って点字もスラスラできますし、音に敏感でほとんどの人が絶対音感を持っていると言われています。一方で自分のような中途の視覚障がい者は、色はもちろん判りますし物や動きをイメージ出来たりっていうメリットはあります。ただ「障がい受容」といったところで受け入れが難しかったり、引き籠ってしまったり悲観的だったり、社会参加っていうことでは中途の視覚障がいの人のほうが難しいかな。あとは先天性視覚障がいの子に「どうやって色わかるんだよ」って聞いたらやっぱり「色わかんない」って。小学校で色の勉強をするらしいんですけど、例えば「トマトは赤い。空が青い。芝は緑。」そうやって覚えるって。あ、言葉として覚えるんだなって。先天性視覚障がいの人はそうやって勉強して、社会の中で溶け込むように小・中・高校と訓練を積んでいるんだなって、肌で感じましたね。

障がいを受け入れて つかんだ成功体験。

—なるほど。では山口さん自身は、どのように障がいを受け入れたのですか？

山口：高1の時は正直「盲学校に行っている」という自分が嫌で。白杖を使うことにすごく抵抗

があって、地元では一切白杖を持たずに友達の後ろをくっついて歩いて自転車の後ろ乗って…そういう生活でした。点字を使って盲学校で勉強することにも抵抗がありましたし、なんか「人からどう思われてるんだろう」とか、そういうことばかり考えていた時期だったんですけど、高1の冬に「ゴールボールのユース代表合宿があるから来てみないか」って言われて。初めて代表合宿に招集されたんですけど、その時まだ自立出来ていなかったし不安だったんで、父親について来てもらって。そこで他の視覚障がい者は全盲でも弱視でも、当たり前にとりてそこで来て身支度をしていて。そういう自立した姿を見て「自分はまだまだだな」と思いましたし、目が視えないからって自分に甘かったなって気づかされて…本当に「自立しなくちゃいけない」って思う大きなきっかけだったなと思っています。そこからはなんでもかんでも自分でやるようになって、白杖を使って歩くようにもなりましたし。点字での学習や音声での携帯…いろいろと自立訓練をして、学校でも積極的に取り組むようになりました。

—自立した選手たちとの出会いが大きな転機となったんですね。ゴールボールをはじめたのは、何がきっかけだったのですか？

山口：高校の部活動ですね。顧問の先生が当時の日本代表キャプテンで、その先生に憧れて自分もこのスポーツで頑張りたいな、という気持ちになったんです。体験会やイベントでは「ゴールボールはコミュニケーションスポーツ」と紹介するんで

すけど、やっぱり皆さん目が視えないと不安になるんですね。ボールを捕ったりパスをしたり、視えない中でどうするかっていうと、呼びかけたり返事をしたり。視えていたら当たり前に出ることが、視覚を遮断するとやっぱり出来なくて、それがコミュニケーションを取ることによって出来る。こういうの「スモールステップの成功体験」って言うんですけど、当たり前に出ることが何らかの理由によって出来なくなり、そこから何かひとつ工夫することによって出来るが増える。こういうのってすごくうれしいですね。それで改めて気づかされたのは、やっぱり自分が悩める時は当たり前で電車乗ったり、食事をしたりとか。そういうことが目が視えなくなって全て友達とか家族にやってもらっていたけど、先ほどの「自立しなくちゃいけない」という。必死に自立活動に取り組んで、点字で読書したりとか。水戸の盲学校から初めて電車ですぐに家で帰った時はすごくうれしかったです。高2の5月でしたね。自分の家はすごい田舎で田んぼの中なんですけど、近づくにつれカエルが大合

唱しているのが聞こえてきて。めちゃくちゃうれしかったですね。当たり前に出ることが出来なくなって、でもまた努力してそれが出来るようになるっていう。「スモールステップの成功体験」があったから成長出来たんだと今、思っています。

—ゴールボールや盲学校の環境からは、学ぶことが多かったのですね。

山口：そうですね。もともとゴールボールは目を負傷した傷痍軍人のリハビリとして始まって。パラリンピックも戦争で下半身不随になった人たちのリハビリとして始まりました。ロンドンの病院で、グットマン博士という人が車いすの人の運動会を行ったのが始まりと言われていて。博士が残した言葉で「失った機能は数えるな。残った機能を最大限に活かせ。」っていう言葉があって。それに感銘を受けて本当にそうだなって。いま持っている、この残った機能。残ったものを最大限に生かして何かに取り組む。すごく大切な事だなって。自分もただ一つ「目が視えない」だけなんですよね、本当に。耳は聞こえますし、味もわかる。鼻も

note 【視覚障がい】

視覚障がいという「真っ暗な世界／点字を使用」というイメージをされがちですが、そうとは限りません。大まかに全盲／準盲／視野狭窄などのタイプに分けることができます。全盲は光を感じない視力ゼロの状態。それに対し光覚という、光は感じるが文字を読むことは出来ず点字を使う人を準盲／半盲（全盲に準じる人）と言います。視野狭窄は文字通り視野が狭く、視えている範囲はあるがそれ以外は真っ暗な状態。たとえば「トイレットペーパー」の芯の穴から景色を見ているようなイメージです。全盲以外の準盲／視野狭窄や中心暗点／夜盲症など一般的な眼鏡などで矯正のできない低視力を総称して、ロービジョンとも言われます。

※ この記事は、同行中の会話および授業での講演内容をインタビュー形式に再構成したものです。

（※1）レーベル病／遺伝子の突然変異により発症する難病。両眼の急激な視力低下や視野欠損症状が起こる。現在有効な治療法は確立されていない。

さく。体だって丈夫。いっさい風邪も引かないですね。酒に酔って潰れちゃうくらいですね。アスリートなのに良くないけど。これは秘密ですね。ほんとそれらしいです。ただ「目が視えないだけ」なのに、そんな悲観的になってもしょうがない。本当にそう思いました。だからこそスポーツをやつて結果を出し続けて、多くの人に感動と勇気を与えたいと思いました。

一その言葉で、とても前向きになれたんですね。ところで先ほどから「自立訓練」という言葉がありますが、具体的にどのようなものですか？

山口：白杖を使っての歩行や電車の乗り方などの訓練、点字の勉強など、いろいろありますね。

一緒に電車に乗りましたけど、思った以上にスムーズに動けるものだなと感じました。

山口：自分の場合は、たとえば地元の駅とかだと視えていた時に知っていますからね。つくりが変わらなければそのイメージがあるのは大きいです。電車にしても自動改札にしても「こういうものだ」って知っているから。

一食事や買い物はどうされているんですか？

山口：食事はいつでも出来ますよ、学食とか知っている店だったら。買い物はちょっと難しいですね、友達とかに手伝ってもらわないと。でも慣れた店とかコンビニとかだったら大体の（商品の）場所はわかるんで、おにぎりとかは適当にパッと手につくちゃって。で、食べてから「ああ、この味かあ。」って感じます。まあ自分好き嫌いもないです。

一場所はおわかって、商品を選ぶのは人の目がいるわけですか。話がかわりますが、電車に乗っている時にスマートフォンの使っていましたね。それも学校の自立訓練で？

山口：いえ、パソコンの授業とかはありましたけど、これは自分で普通に使うだけです。で、iphoneでは「Voice Over」っていう音声のシステムが導入されて、視覚障がい者が使用できるようにサポートされています。なので自分もTwitterやFacebook、LINEとかみんなと同じように携帯を使っています。LINEでスタンプが送られてきてても「スタンプ」としか読み取れてくれないですけど。時計にもなりますし、電車乗ってる時はメールとか連絡返したり、ニュースをチェックしたりとか。講義とかいろいろとやらせてもらってるんで、話のネタになるようにニュースは必ずチェックします。

一自立訓練を通しての成長が、一般大学への進学のかきわけになっていたのですか？

山口：きっかけとしては、八割ぐらいは按摩マッサージ・鍼灸の職に就きます。自分もそういう道になるのかなと思ったんですけど、盲学校でいろいろなチャレンジをする中でどうしても大学に行って「バリバリビジネスの強化指定選手になって学生から刺激をもらいたいかならうないな」と思ったんです。けど、やっぱり全盲の学生の受け入れは難しい。教授会にげてもらって断りを受けた大学もありました。けれども、ほけ門前引いた大学もありました。そんな中で東洋大学を見つけて、オープンキャンパスに通いつめて。点字の勉強も高2からは本格的にやっていたんで、小論文と英語でしたか。たままふって。面接したら、きっとよかつたんでしょ。気に入られた。東洋大学に入学することが出来たんですけど。

今日は朝から地元の法人会で社会人を対象に講演し、学校では学生を相手に授業。さらにこの取材を受けていて、夕方からは練習と、か

[illegible]

一日密着レポート.01 / ついて行ったら、こうでした。一緒に行ってはじめてわかった日常のこと。

今日、ついて行って
いいですか？

CASE.01 山口凌河さん

大学の授業に就活、ゴールボールの練習、さらにその合間を縫ってのイベントや講演など多忙な毎日を送る山口さん。その1日に密着して、視覚障がい者の日常とはどんなものなのか、見せていただきました。



am.9:00 – am.10:40

JR

都営地下鉄
有楽町線

取手一日暮里一巢鴨一板橋本町

7月中旬、JR常磐線取手駅am9:10。「9:10か9:17の電車に乗りますか?。」そう言われて改札口で待っていたのが、実際には9:09だった電車はいつの間にか発車してしまい、9:17の電車は間に合うのか、それともどこまですれ違い、今日では9:09の電車に乗ってしまっている、すでに一日が早くもバタンになってしまふ…そんな不安が頭をよぎった頃、山口さんが改札口の向こうに顔を見せました。「恰宿に行く新幹線の切符を買うんぢやっと待って下さい。」そう言ってみどりの窓へ向。切符を買いきはだ慌てて様目もなく改札を通り「お待たせしました。」と言いながら山口さんの足が向かったのは、9:17発の電車が止まらない4番線ホームに降りる階段。[5番線ですな。]と伝えると、あれ、という様子を見せつづき踵を返し、すぐさま5番線への階段を降りて行きます。どうやらエスカレーター工事の影響で発車ホームが違うようです。が、普段使っているうしろに視えていた頃の記憶もある最寄駅、移動に支障はありません。しかし待つ通りではない変更を察知するには、他人に聞くほかありません。白杖を大きく振るともスムーズに空いてるドアか

来乗車。車内には空席もありますが、全ての座席を白杖で探そうとする事はず、いつもは車両端にある優先席が空いていれば座るとしています。

「乗る車両と、乗換える場所をだいたい決まっていますね。」車両から車両へと移動しているところ、乗り合わせた友人の座席を教えてくれています。その友人と会うのしほはふりよりの様子で、共通の友人の話や就活の話などごく普通の大学生の会話もしながら、友人がバッグのポケットから取り出したくれたイヤホンと片耳を入れ、スマホの着信やメールなどの確認をしています。通学路で友達と会うことは半々くらい、ひとりの時はスマホでニュースをチェックしたり、連絡を返したりしているそうです。ちなみに当日は地元法学会に招かれ、社会人向けモーニングセミナーですでに講演させて頂きました。その後は友達に送ってもらって駅まで来たこととことです。

日暮駅まで乗換え。かなりの混雑ですが、いつもの乗車位置、いつもの乗換え。慣れた環境ならスムーズに行動できます。白杖の動きは最小限で、階段などを確かめる程度の動きで手すり線へ。

巣鴨駅で地下鉄に乗り換えます。驚くのは自動

改札の距離感。白杖で改札機を探るでもなく、
 ちょっとの位置で定期券をかざして通り抜け、割
 引運賃（※）を改札窓口に申し出る時も、迷い
 な（乗客）に話しかけるも。中途失明の山口さん
 はもちろん自動改札も窓口も見ただ事があるで、慣
 れた環境にそのイメージを加えて補充できるのは
 大きなメリットです。とは言えそれは「慣れたま
 えば」という話であって、初めての場所に行くに
 は他者の伝えが必要になし、ひとりで行動する
 には少なくとも一度は他者の同行を伴っ
 て、そのルートを経験しておく必要があるであ
 る。実際にこの巣鴨―板橋本町の区間、通常は友
 人と一緒に通っていらっしゃる、ひとりで乗車す
 ることはあまりないとのこと。板橋本町下車ま
 はスムーズでしたが、駅構内ではこのまでの駅
 と比べるとやや不慣れな様子で、階段や改札の方
 向を確認しながら行動していました。ちなみに電
 車に乗っているときは「乗ってさした扉の位置」
 をしっかりと把握していて、そういった自分の位置・
 場所・方向を掴む感覚は立派訓練身に付ける
 そうですが、満員電車で乗った扉の位置を把握
 するのは難しいようです。

(※2) 障害者手帳を有する障がい者とその介護者が共に乗車し、同一券種、同一区間の乗車券を同時に購入する場合に割引が適用される。



am.10:40 – pm.14:30

都営地下鉄

板橋本町一白山

音響装置のない交差点では、知っているルートな場所自体はわかっても「青か赤か」の判別はやはり他者の支えが必要にやらず。ただ山口さんの場合は、見えていた頃の「交差点とはこういうもの」というイメージに加え、車の通行音などである程度判断することが出来るそうで、これが先天性の人と違う点のようです。

そんな話をしながら水泳の授業があるプールへと向かって、山口さんは「あっ、びっくりしたー」と声をあげました。どうやら歩道沿いの金網から飛び出した植物の枝が、顔に触ったようでした。見えていて気にもしないような場面なので、一緒に歩いていても注意を促すことが出来ませんでした。

水泳の授業では安全確保のために、指導員がマンツーマンでつきまよ。泳いでいる時に壁にぶつかったりしないよう、ゴール付近で壁に触れて教えるのですが、プール内では慣れた様子で白杖が無くとも普通に歩いています。ここでひとつ気づいた事は、山口さんは会話する時にその人の方へ顔を向けて話します。声のする方へ向いているのだと思います。山口さんの場合は目を閉いている事もあって、側から見ていて目が視えていないとも思えません、実際会話中にその事を忘れてる人もいたように思います。

授業が終わり、友人たちと白山キャンパスへ移動です。3限でゲストスピーカーとして話をすることになるので、50分で移動と食事を済まなければならない、かなり忙しいです。駅へ向かう道中「どこで食事するか」という話を延々としていたが、結局は学食で食事する事に決まり「渡河、走れないだろ。」と友人たちが校舎に先回りし、学食で席を取り食事を買っておいてくれる事になりました。白杖でも走れない事はないようですが、やはり危険度は増すのだと思います。

先回りした友人たちが用意してくれた席に着き、慌ただしい食事です。ひとつずつ手取りで食器を触り「これ何？これは？」とその器に何かが盛ってあるか、友人に確認します。サラダにヒスタ、ミニ丼にデザートと学食らしい盛りだくさんのメニューを、いったん器を持つとそれを置くことなく、全てをかき込んでいくように食べるのは「急いで、お腹が空いている」器を持ち替えるのが面倒」というところでしょうか。箸の感覚で器が空になったのはわかるのですが、友人に「これもう無い？」と確認。その通りなのですが、「いや、まだバタ50本くらい残ってますよ」といった「視えないイジリ」も軽く受け流しつつ、あっという間にたげられます。「友人あつたら授業間空にきて、ありがとね。」と友人にお礼を言いつつ教室へ。

校内で歩きにくくに見えるのは、学食内の角。ここはフードコートになっていて壁沿いにくっつくの店があるのですが、店の前に整列用のロープが張ってあります。柱も多し、慣れない私には上手に誘導出来ずにコンクリートの柱柱にぶつかりそうにさせてしまいました。

3限「特別支援教育論」。90分の授業時間の中で、視力を失った経緯やその前後の心情、盲学校のこと、ゴールボール、視覚障がいについてなど、時折笑いを交えながら自らの経験を話します。生徒の食いつきは良いもの、[パハリントック]発祥の国は？といった山口さんの問いにはすぐ手が上がります。見兼ねて回答したのは先程まで一緒にいた、学食に先回りしてくれた友人たちです。残念ながらその回答は間違っていて、回答者が彼らだった事に山口さんが気づく事はありませんでした。

「視覚障がいの人は一日のスケジュール
どこで食事するかと、決める人が多いと思
います。目についた店に入る、ってならない
んですか。知っている店とか学食とかでなら、ひ
も食事も出来ます」 授業も終わり、ゴールボ
ルの練習所のある新所沢まで向かう前に、私に
物やイレを促しながらこの話について話をし
ました。しなともやはり知っている場所で済ませておか
さず、知らない場所で見ついたら行く、とは
ないのでしょうか。

ここからは山口さんが「大学内で一番の
と紹介してくれた、林真生さんが同行しま
う」さんと出会うまで視覚障がい者と接した
ことがなかった、という林さんですが「行くに仲良
しかったです。い、ゴールボールにも興味を
審判講習を受け練習にも参加している林さ
ん視覚障がいの人々と関わるなかで学ぶこ
とが、逆になんか変な感じ」とか言って、い
ながら練習終わって、菓物の立ち飲み屋で
で帰ります。マサオさんにて。クン酸が
疲労回復するんですよ」と山口さん。

林さんは「同行護護」(※3)という資格を
しています。視覚障がいの者の移動や食事、買
得の目のサポートをする資格で、山口さんはそ
れを今年の4月12日に上げました。資格
したことで、山口さんと行動を共にしなら取
りもなると、林さんにとっては一石二鳥の
こと。視覚障がいの者の歩行を誘導するといった仕事
はありませんが、きりがない肩を貸したり、昨
はあらた木ものをバンバンと叩き、音を
自分の位置を山口さんに伝え、誘導します。

林さんに話を聞いている間、山口さんは
で連絡を返したりしています。メールの文
字がないや、なども林さんが見てあげる、

ちに眠りこんでしまいました。「寝てる時によくビクってなんですよ、こいつ。」林さんの同行があれは眠ってしまっても安心、という事なのでしょ。

ユニバーサルデザイン関連の企業へ就職することにした、という林さん。そういった部分も含め山口さんと出会った事でいろいろ生活が広がったといえます。「にたけが充実した学生生活を送っているやつかもたないかな。羨ましいですよ。」という言葉がとても印象的でした。

所沢駅で乗換え新所沢駅で下車。道中チームメイトと合流し、練習所である国立リハビリセンターへは10分程度の道のりです。「ちょっとコンビニで飲み物買ってから先行って。」と皆を先にコンビニ、店に入る山口さん。ついて行くと慣れた様子で、買いたい商品の大体の位置までは勝手に辿り着きます。手を取る商品を「コレなんですか?」と聞かれ、「ひとつとひとつ〇〇です」と答えますが私には山口さんが買いたい商品がわからないので手渡せません。「すいません。いつも買ってるあのプロテインのや、ありますか。」と店員さんに声をかけると、すぐにとの商品がかわった様子で、小走りに棚から商品を取ってきます。小銭入れは硬貨の種類ごとに取り収める仕様のもので、少額の支払いでは手間取ります。ただ5円、1円の収納スペースがないので「おつりは募金で」と受け取らまわりました。まだ現金決済が主流の現状ではこういうシーンは多いのかも知れませんが、今後電子決済が普及すればレジ前か募金箱が消え、代わりに視覚障がい者にとっての利便性が高まるのかも知れません。一方で商品を選ぶ、という行為についてはまだまだ環境が整っているとは言えませんが、例えばARマーカータのようなものを商品につけて陳列し、それをスマホをかざして読み取るというような事が出来れば、商品を選ぶことも出来るようになるのではないのでしょうか。

pm.18:30 – pm.21:30

西武鉄道

新所沢—所沢—池袋—日暮里—取手

体育館に着くと、すでに練習をはじめているメンバーもいます。弱視や視野狭窄の人も、アシシュードを付けてはたき皆同じ条件で楽しめるのがゴールボールの良い所。山口さんは「音や声で誰がコートに入っているか、どんなボールを投げているかわかるか」といいます。競技経験の浅いメンバーが山口さんにはアドバイスを求めている。丁寧に応える姿が印象的でした。もちろん勝手知ったる空間である体育館内では白杖は必要なく、壁際に白杖を置いたまま練習に励みます。かなり激しく動いてもどこに自分の荷物があるか、練習中に外したボタンとどこに置いたかわかっていない様子ですが、誰かがそれを動かしちゃうと、こころ慣れ親しんだ場所でもとても当然事を知る術はありません。

練習を終えたメンバーたち。「お前髪の毛長すぎない?」「やりた髪型があるんすよ。」なれない話をしながら、通い慣れた道を駆へ。電車を待つ間、林さんの口じばりで負けず山口さんぐんぐんと自販機の前へ歩いて行くので、ついて行きます。「あと30くらい先の行っかわかってすよ。」自販機の前についても商品がどこにあるかはもちろんわからないので「炭酸は何と何があるか?」「コーラリアルゴールドはどこすね。」「あ、じゃあボタン押してもらえんか?」「あ、はい。じゃあコーラ押します。」ボタンさえ押せば、あとはSuicaで払って取り出しの問題ない。この辺は親しい頃の写真がモノを言うようです。電車を待つ皆の元に戻り、買った飲み物を林さんに渡します。

帰る道中、気になる話がありました。白杖を携っていたり、そうでなくても視覚障がい者である事がわかった時、何の助けようとして声をかけてくれる人たちが。とあれがたいと思え「声をかけてくれた人が思ってくれない」人では

ない人」であることがあります。確かに視覚障がい者であれば、ただ一方で程度は人それぞれで、例えば文字の読解は理想でも、日中の歩行には支障の無い程度に視野を確保している人もいます。そんな時、彼らの想いは共通です。それは「感謝の気持ち伝えながら」として一方で対応はそれぞれです。ある人は「ありがとうごさいます。でもある程度視えているから大丈夫ですよ」と答え、ある人は「助けが必要な程に視えていない訳じゃない」と思いつく声をかけてくれた人の善意に伝えるべく、その人のイメージに寄せて「全く視えない事を装ってしまおう」という人もいます。

「電車内で座席を譲ろうとしたのに座ってもらえなかった、一度断られたことで、それから席を譲ることが出来なくなってしまう」というのはよくある話ですが、他人の善意に対して正しいを返さなければ、それによって「これから先、声をかけてもらえるかもしれない視覚障がい者を減らしてしまおう」とを口にし、自分を装ってしまふのが、それは当事者が考えることではなく、声をかける側の問題となってしまうと考えると、自分の心小小なナゲが、しかし確実に刺さった心地がしました。

取材時は就活を継続中だった山口さん。「経済的にもしっかりと自立したい」と考えている山口さんの夏休みの、まずは就活をしつつやり遂げ、それが終わったら第2競技に集中したいという、卒業旅行などとは考えているの間聞いてみると「行くかもしれないけど、それよりは競技を優先したいですね。あと2年しか無いですから。」という答えが返ってきました。それほやうでしょう。2020年、日本のをうけて幕張メッセのコートに立つ自分の姿を見据えている、彼であらべ。

「人を通して障がいを知る」

「gente」創刊準備号の発行から4か月。文字通り準備期間を経て、いよいよ定期創刊です。この期間にさまざまな人と会い、場所に行きました。その結果、皆さまのご協力のおかげをもって60カ所近くの配架場所を設ける事ができました。この創刊号は、さらに多くの場所でみなさんの手に取っていただけるようになるはずです。

「gente」のベースになるアイデアが生まれたのは、ちょうど昨年の夏頃。そこから行動を開始し、年明けには創刊準備号の制作に向けて動き出していました。

手探りで制作に踏み切った創刊準備号でしたが、「これは面白い」「これをひとりでも多くの

人に読んで欲しい」と、手応えを感じることができました。創刊準備号をご覧いただいた方々には、ポジティブな意見を多くいただきました。配架を了承してくださった上に、後日電話で他の施設の情報をくださった方もいましたし、知り合いに配架を呼びかけてくれる方もいました。皆さまの反応を目にして、「genteは面白い、必要な情報だ」と自信を持つ事が出来ました。

ですから準備期間はもう終わりにして「gente」を定期創刊します。まだまだ知りたい事はたくさんあります。スペイン語で「人、人々」という意味の「gente」。これからもさまざまな人に話を聞き、その人の仕事や日常を通し、障がいやそれを取りまく環境について識ることのきっかけとなれば、との想いをもって「gente」を作り続けて行きたいと考えています。

応援してくださる皆様へ

有償配架のご案内

発行ごとに選んでできる
気軽な支援のカタチです。

1部
¥60

(50部より／ボリュームディスカウント有)

有償配架は、「gente」をお買取りいただいた上で、フリーペーパーとしての配布にご協力をいただくシステムです。「gente」を応援したいけど、協賛まではちょっと…という方々にぴったりの支援方法です。お買取りいただいた「gente」は店頭配架以外にも、イベント会場での配布など、どんな配布方法でも結構です。ご協力いただいた際は、当該号の誌面およびHPに「有償配架協力先」として掲載されます。また、発行号ごとに有償／無償配架を選択することも自由にできます。

協賛よりも気軽に「gente」を支援することができる有償配架を、ぜひご検討ください。

「参加」を必要としています。

「genteを作りたい!」「genteの運営を手伝いたい!」

「何ができるかわからないけど、何かしたい!」

なんでも結構です。あなたにできることで

gente編集部に関わってみませんか?

※職員募集ではありません。
ボランティアスタッフとなります。



「場所」を必要としています。

ひとりでも多くの人に「gente」を手にとりていただくために

「gente」の配架スペースを募集しています。

お店、学校、イベント会場、公共施設…

どんな場所でも、何部からでも

できる範囲で結構です。

genteは
必要としています。



「支援」を必要としています。

「gente」はNPO団体が制作するフリーペーパーです。

発行を継続するために、皆さまからの協賛金を必要としています。

□個人会員協賛…¥5,000 (年間／1口)

「gente」本誌を郵送にてお届けいたします。(年4回発行予定)

□団体企業協賛S…¥300,000 (年間掲載／4号分)
webサイトおよび誌面に広告(中)を掲載いたします。

□団体企業協賛G…¥600,000 (年間掲載／4号分)
webサイトおよび誌面に広告(大)を掲載いたします。

□団体企業協賛U…¥1,000,000 (年間掲載／4号分)
webサイトおよび誌面に広告(特大)を掲載、表紙面タイトル下部に「Supported by～」と社名記載いたします。

参加・場所・支援・有償配架 すべてのお問い合わせ・詳細はinfo@gentepaper.orgまで



gente 人を通して障がいを知る。

ご意見、お問い合わせはこちらから。👉
皆様の貴重なご意見、お待ちしております。

発行：NPO団体 gente編集部

www.gentepaper.org

info@gentepaper.org

[@gentepaper](https://www.facebook.com/gentepaper)

